

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年 5月23日現在

機関番号：37111

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22520114

研究課題名（和文） 17世紀初期ローマ宗教画における庶民の期待と民衆表現

研究課題名（英文） Research about Representations of Common People in Religious Images of Early Seventeenth Century Rome and about Their Acceptance

## 研究代表者

浦上 雅司（URAKAMI MASASHI）

福岡大学・人文学部・教授

研究者番号：60185080

研究成果の概要（和文）：16世紀末から17世紀初頭のローマでは多くの修道会や世俗同信会が庶民への教理教育に力を入れ、また「七大教会巡礼行」や「四十時間聖体拝礼」などもあって、庶民が「聖なる物語」を、かつてない関心を持って見たことが確認された。当時の宗教画に見られる庶民表現ではカラヴァッジオが注目され、多くの画家が彼の追従者とされるが、現実的な庶民表現は、当時のローマ絵画ではより一般的な要請であり、ドメニキーノなど「古典的傾向」の画家たちも独自の庶民表現を生み出していた。

研究成果の概要（英文）：From the end of the 16<sup>th</sup> to the beginning of the 17<sup>th</sup> Century in Rome, many religious orders and confraternities contributed to the religious education of common people offering them catechism classes, pilgrimages to seven patriarchal churches and forty hours' devotion of the Blessed Sacrament. Realistic representation of common people in this period is especially studied about Caravaggio and many painters are labeled as "his followers". But new and realistic representation of common people was a general requirement in the Roman religious painting of this period as is evident from the analysis of works of "classical" painters such as Domenichino.

## 交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2011年度	600,000	180,000	780,000
2012年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	2,200,000	660,000	2,860,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学、美学・美術史

キーワード：美術史

## 1. 研究開始当初の背景

(1)本研究代表者は、17世紀初頭のローマで活動した画家ドメニキーノを中心として、この時期のローマの聖堂に描かれた「聖なる物語絵」の特質をさまざまな観点から考察してきた。対抗改革期のローマ教会は、特に宗教画に「現実的で説得力のある表現」を要請しており、これとの関連で、絵画表現にキリスト教考古学の成果が反映されるなど「歴史主義」的傾向が見られる。宗教画に登場する一般庶民が現実に即して表現されるようになったのもそうした傾向の表れと推測される（こうした庶民表現の特質は、《ロレトの聖母》（ローマ、サンタゴスティーノ聖堂）など、画家カラヴァッジオの作品に関して早くから指摘され、研究されてきた）。

(2)ドメニキーノの《聖女チェチリアの施し》（ローマ、サン・ルイジ・デイ・フランチェージ聖堂）にもかつてないほど現実的庶民表現が認められるが、カラッチの直系の弟子でありプッサンにも大きな影響を与えたこの画家のこうした表現を「カラヴァッジオの影響」として片付けることはできない。彼の描く物語は古典的な理想化された情景描写が際立っているからである。そのため、回り道になるが、16世紀末から17世紀初頭にかけてのローマにおける庶民の聖画像に対する「期待の地平」を多角的に検討することが、当時のローマ画家たちの制作態度を現実に即して理解するために必要という認識にいたった。

(3)こうした観点から、設備の全面更新のためしばらく閉鎖されていたが、平成22年度から再開されるヴァチカン図書館などに所蔵される、当該時期に出版された庶民向け宗教的パンフレットを丹念に調査し、ローマ庶民と聖画像の関わりについて具体的な姿をで

きるだけ明らかにする作業を行うことが、当該時期の宗教画と庶民の関係を具体的に理解するためには必要不可欠な前提となると想像された。

(4)こうした同時代の証言に基づく考察を積み重ねて17世紀初頭の「ローマ庶民の聖画像への期待」を出来るだけ具体的に明らかにしてから、申請者がこれまで研究を進めてきた、画家ドメニキーノが描いた宗教絵画の表現を考察することによって、この画家の作品だけでなく当時のローマにおける聖画像受容の有様に新たな観点を提供できると考えられ、こうした考察背景から本研究が企画されることになった。

## 2. 研究の目的

(1)手工業者の多かった近世ローマで、庶民の識字率は想像以上に高く、対抗宗教改革期のローマで、カトリック教会が印刷して配布した宗教パンフレットは広く普及していた。また、オラトリオ会が積極的に行った「七大聖堂巡礼行」や「四十時間聖体拝礼」など庶民を巻き込んだ宗教行事も盛んに行われていた。これらの行事に関する当時の文献を渉猟し、ローマ庶民と宗教美術の一般的関わりの有様を解明することが本研究第一の目的とされた。

(2)より狭義の、美術史的観点から本研究の目的となったのは、当該時期のローマで活躍した画家たちの中で、聖堂に聖画像を描いた画家の庶民描写を比較検討し、その特質を明らかにすると同時に、そうした絵画を見た人びとの反応を、可能な限り同時代の文献から考察することであった。17世紀初頭のローマで、一般庶民も多く訪れる聖堂の祭壇画や聖画像、装飾などをおこなった画家たちには、そのような想定される一般庶民の「期待」をも

念頭において制作をおこなったと推測され、それを明らかにすることが目的として適切であると考えられた。

(3)こうした戦略的展望に立って、短期的には、  
ア)17世紀初頭のローマに暮らす庶民がどのように聖画像を受容したのか、様々な記録文献を渉猟して可能な限り具体的に確認し、その上で、イ)ドメニキーノをはじめローマで活躍した画家たちが宗教画における庶民表現でどのような工夫をしたのか、この時期に描かれた作品を取り上げて考察する、の二点が当座に実現すべき目的とされた。

### 3. 研究の方法

(1)17世紀初頭のローマにおける知的な美術鑑賞者の「聖なる物語絵」受容は、この時期のローマで活躍し、美術理論や美術家伝を書き残した人びとの著作から比較的詳細に検討できる。特にジュリオ・マンチーニやヴィンチェンツォ・ジュスティニアニは、絵画の享受者ないし美術家のパトロンとしての立場から著作を残しており、この意味で大変に重要である。

(2)これに対して、同時代のローマを生きた「庶民」の美術受容に関しては、もちろん、そうした人びとが書き残した著作が存在しない以上、知的な階層の人びとが書き残した美術文献に登場する庶民の有様を解釈するか、あるいは、同時代の庶民を巻き込んだ宗教行事を記録した文献を渉猟し、そうした行事に参加した庶民の有様から彼らが、広い意味での「宗教的イメージ」を検討することが求められる。

(3)前者の例としてよく知られるのは画家ジョヴァンニ・バリオーネが「カラヴァッジオ伝」で「この画家がサン・ルイジ聖堂に描いた《聖マタイ伝》は、質の悪い人びとからひどく褒められた (da' maligni sommamente

lodata)」とか、《ロレトの聖母》が「庶民からひどく騒がしく受け入れられた (da popolani ne fu fatta estremo schiamazzo)」と書かれていることである。これ以外にもドメニキーノの伝記など同時代の美術家伝で庶民の作品受容の有様を記述した例はあるが、何れも書き手は庶民とは一線を画した社会階層に所属する人物であり、バリオーネの場合にはカラヴァッジオと訴訟沙汰に巻き込まれた同業者でもあるから、記述を鵜呑みにする訳には行かない。

(4)一方、1575年や1600年に行われた聖年時のローマにおける宗教行事や巡礼への対応などを取り上げた同時代の記録文献が残っており、これらは、「間接的に」、ローマ庶民の、重要な宗教行事やそれに関連した美術活動への対応の有様を伺わせてくれる。直接的な記録でない以上、具体的な作品への庶民の接し方を教えてくれるわけではないが、当該時期のローマにおける宗教美術を巡る庶民の動向を推測する幅広い手がかりを与えてくれると思われる。またこうした類の同時代文献は少なくない。

(4)上記のように「17世紀初頭ローマ庶民の宗教画受容の特質解明」という観点から同時代文献を渉猟しその内容を検討すると同時に、特に、これまで多角的に作品や生涯を検討してきた画家ドメニキーノが聖堂に向けて、従って庶民を含む不特定多数の鑑賞者を想定して描いた作品、具体的にはサン・ルイジ聖堂のボレ礼拝堂の《聖女チェチリア伝》壁画やサン・ジロラモ聖堂に描いた祭壇画《聖ヒエロニムス最後の聖体拝領》を取り上げて、そこに描かれた庶民表現の特質を解明し、カラヴァッジオのそれと比較検討することによって17世紀初頭のローマ宗教画における庶民表現の一般的特質を明らかにする方法となった。

#### 4. 研究成果

(1)本研究は上記のような「戦略」のもと、3年間にわたって行われた。

(2)初年度、16世紀末から17世紀初頭、民衆向けに出版されたパンフレット類を百点以上、調査した。そのほとんどは、小さな用紙を二つ折りで8頁に仕立てた簡便なもので、内容的には、カトリック信徒として生きる基本的道徳を、キリスト伝、聖人伝などの具体例に即して教えていた。また、大部分は、覚えやすいように、韻を踏んだ4行詩の形式によって物語が構成されていた。これらのパンフレットは、つまり、読解および暗記の両方に資するよう意図して制作されたもので、ローマにおける庶民向け識字教育と宗教的知識の普及が密接に結びついていたことが確認された。

(3)またドレスデン絵画館に出張し、同館が所蔵する、ドメニキーノが《聖女チェチリアの施し》を描くに際して手本とした、アンニーバレ・カラッチ作《聖ロクスの施し》を調査した。両作品はともに庶民が主役として登場するのだが、実地調査に基づく比較検討によって、ドメニキーノがローマのサン・ルイジ・デイ・フランチェージ聖堂に描いた《聖女チェチリアの施し》では、カラッチの先行作より、はるかに現実的で説得力のある民衆表現が行われているのを確認した。当時のローマで庶民を意識した絵画制作が行われたのは間違いなく、この観点から当時のローマ宗教画を考察する妥当性が再確認された。庶民のドメニキーノだけでなくカラヴァッジョの民衆表現も宗教教育との関連から検討される可能性が出てきた。

(4)一年目から二年目にかけて、継続的に 1) 16世紀から17世紀にかけてのローマで暮ら

す庶民が宗教美術と具体的にどのように関わっていたのかを文献学的に検討する、2)

ドメニキーノの民衆表現の特質を師アンニーバレ・カラッチ、同世代の有力画家カラヴァッジョとグイド・レニらのそれと比較検討して明らかにする、の二点に関して、ローマの図書館での同時代文献調査や聖堂の作品調査を行った。

(5)第一項に関して、ローマに多数存在した世俗同信会 (Confraternità laica) が、社会階層を縦断して会員を集めており、民衆の宗教活動、宗教美術との関わりを具体的に考察する上でその調査が有効と判断された。

特にこの当時のローマで活躍し、同信会活動や庶民向けの宗教教育で大きな足跡を残した聖フィリッポ・ネリが創立に関与した聖三位一体同信会 (Confraternità della SS Trinità) および同聖人が企画し、多くの庶民も参加して定期開催された教会巡礼についてはさまざまな資料が残っており、その文献学的調査によって、16世紀末から17世紀初頭にかけての、ローマの庶民と宗教文化活動との関わりについて具体的な知見を多く獲得できたのは大きな収穫だった。

(6)第二項に関しては、一年目におこなったドレスデン絵画館に保存されるアンニーバレの作品調査に続いて、ローマ近郊グロッタフェッラータ修道院にあるドメニキーノの先行作品を実地調査した。さらに長年、修復中だったローマのサンタ・チェチリア聖堂に残る、聖女の浴室 (聖女殉教の場とされる) に設けられた礼拝堂を調査し、ドメニキーノがサン・ルイジ・デイ・フランチェージ聖堂に描いた聖女伝との関連について知見を深めることができた。これによってドメニキーノが聖女殉教場面を描くに際してどのような工夫をしたのか、観衆 (ローマの住民であり、聖女チェチリアは身近な存在だった) と

の関わりから解明する手がかりが獲得された。

(7) こうした多角的調査により、17世紀初頭のローマ宗教美術における新しく現実的な庶民表現が、決してカラヴァッジオの独創にのみ結びつけられるものではなく、同時代のローマ・カトリック教会の一般的な要請および、当時のローマに暮らす庶民の期待を入れた美術家たちが、独自の立場からさまざまな解決策を提示したと考えるべきだと判定された。これによって本研究当初の仮説が妥当だったことが確認されたことになり、その研究成果は、研究期間中に発表した論文の内容に活かされた。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計4件)

- ① 浦上 雅司 「ジョヴァンニ・バッティスタ・パッセリ著『美術家列伝』の特質：ドメニキーノ伝を手がかりとして」単著 『福岡大学人文論叢』(査読無) 第44巻第3号 pp.1-72 2012年
- ② 浦上 雅司 「フィリッポ・バルディヌッチの美術史観と絵画に関する公開書簡」単著 『福岡大学人文論叢』(査読無) 第44巻第1号 pp.1-60 2012年
- ③ 浦上 雅司 「C・C・マルヴァジーア著『ボローニャ画家列伝』における「カラッチ伝」の特質」単著 『福岡大学人文論叢』(査読無) 第43巻第1号 pp.1-40 2011年
- ④ 浦上 雅司 『『ボローニャ画家列伝』におけるマルヴァジーアの中世絵画観とそ

の特質」単著 『福岡大学人文論叢』(査読無) 第42巻第1号 pp.1-39 2010年

[学会発表] (計0件)

[図書] (計0件)

[産業財産権]  
○出願状況 (計0件)

○取得状況 (計0件)

[その他]

ホームページ等

<http://muse.hum.fukuoka-u.ac.jp/urakami/palatium.html>

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

浦上 雅司 (URAKAMI MASASHI)

福岡大学・人文学部・教授

研究者番号：60185080

##### (2) 研究分担者

なし

##### (3) 連携研究者

なし